

# KEY わーど

第 86 回

遠眼鏡で覗いた大阪の街  
 一 来年はどんな調子でしょう

## 弥次喜多から菅楯彦も…

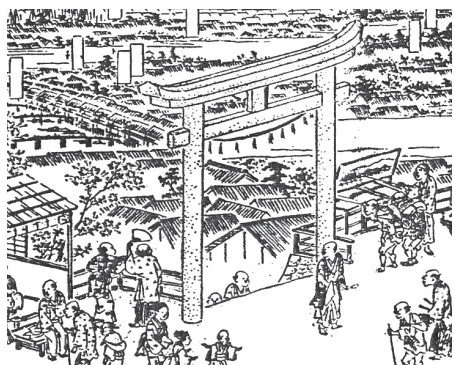
子どものころ、デパート屋上や観光地の展望台の望遠鏡に硬貨を投入し、遠くの景色や眼下の家や人を眺めたものである。3分程でガッチャンと音がしてタイムオーバーになるのだが、こうした望遠鏡の商売は江戸時代からあった。

大坂なら高津宮(大阪市中央区)の遠眼鏡屋である。高台にある絵馬堂から真西に道頓堀川を見下ろせた。五座などの芝居小屋の幟がはためくのも見えただろう。そこで遠眼鏡(望遠鏡)を貸して使用料をとるわけだ。弥次さん喜多さんの珍道中を書いた『東海道中膝栗毛』にも登場し、遠眼鏡を覗く人の横で口舌たくみに解説もし……はるか淡路や須磨、明石が見えるのは言うに及ばず、耳にあてると道頓堀の芝居役者の声色が聞こえるようだ、とか、鼻にあてるとうなぎ屋のにおいがするも同然、といった滑稽だが名調子である。

高津の遠眼鏡屋は、心齋橋筋に浪花土産の店も出した著述家、暁鐘成(1793~1861)の「撰津名所図会大成」の挿絵にも描かれている。この著作は原稿で終わり出版されなかったが、大正15(1926)年、「過去の浪速文化を回顧せしめ、未来の浪速文化を生ましむべき、真に永遠の価値あるもの」を伝えたい希望の下に着手された『浪速叢書』に、未完の稿本として収められた。

『浪速叢書』は大阪への熱い思いから装釘にも凝り、見返しの絵は菅楯彦(1878~1963)、表紙の布を龍村平藏(1876~1962)が担当した。楯彦は、昭和37(1962)年制定の大阪市名誉市民の第一号になった日本画家である。楯彦が描いた。表紙の《絵馬堂(高津宮)》では、望遠鏡を覗く客に名調子で遠眼鏡屋が解説している。昭和4(1929)年の作品なので、刊行直後の『浪速叢書』で「撰津名所図会大成」を見て触発されたのかもしれない。

楯彦の描いた絵馬堂には、『古今和歌集』の六歌仙や北前船、木刀を奉納した額があるほか、高津宮のご祭神である仁徳天皇が国見をする額が掲げられている。



高津宮の遠眼鏡屋(右端)。眼下が道頓堀。



高津宮の絵馬堂 戦前の絵葉書

仁徳天皇が四方の国を眺めると、人家のかまどから炊煙が立ち上っていない。民の疲弊に気がついて「人民之課役」(古事記)、租税を免除するのである。そしてご自身は儉約のため、宮殿が傷んで雨漏りしても修理せず、三年後に再び国見をすると煙が立ち上っていたと言う逸話である。

庶民の愛した遠眼鏡屋を軽妙に描いた楯彦だが、深いところで国見の故事と結びついている。楯彦は少年時代を西区南堀江で過ごし、橋小学校から高台尋常小学校、西区高等小学校で学んでいる。この高台尋常小学校(現・大阪市立日吉小学校に併合)の「高台」は「たかきや」と読む。元禄11(1698)年、南北に堀江を区切る堀江川(埋め立てられて現存せず)に橋が架けられ、高台橋と名付けられた。南堀江に御旅所のあった難波神社の祭神・仁徳天皇にちなんだとされる。小学校も高台尋常小学校となった。

三つ子の魂、百まで。国見の故事は楯彦にとって、大阪の歴史につながると同時に、個人的な思いの籠もるテーマであった。高津の絵馬堂もまた、同宮の祭神でもある仁徳天皇の国見へとイメージがふくらんでいく。

民の痛みを知って善政をおこなった天皇への敬慕の情は、大正10(1921)年制定「大阪市歌」の歌詞にもあらわれ、市民に郷土への誇りを喚起させた(本連載第17回「生気ちまたにみなぎりて、物みな動くなりわいの」《大阪市歌》を知っていますか?」参照)。現代の絵馬堂からはビルしか見えないが、選挙で慌ただしかった昨今、絵馬堂に登る人の心の望遠鏡には何が見えるのだろうか。

### 筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—」(創元社)など。